

登山界“おちこち”の人

インタビュー連載 第26回

山の世界の彼方此方で活躍している人々をたずね、「そうだったのか。」を聞き出します。

日本を代表する、ツインズ(双子)アスリート。ノルディックスキー世界選手権複合団体金メダル、長野五輪個人6位など輝かしい戦歴を誇り、いまはスポーツキャスターで活躍。「次晴登山部」を発足し、日本百名山登頂に挑戦中の萩原次晴さんの登場です。

— 町立草津中学で全日本中学選手権出場、群馬県立長野原高校では全日本強化選手に選ばれました。早稲田大学を出て、1995年のワールドカップ、1月のチェコと2月のノルウェーでは、いずれも兄の健司さんが優勝で、次晴さんとのワンツーフィニッシュでした。さらに3月カナダ、サンダーベイでの世界選手権は団体戦で金メダルを獲得しました。

3歳からゲレンデスキーを始めて小学5年でスキージャンプに出会い、中学に上がると同時にノルディック複合の道へ入りました。中学3年の時に北海道旭川市でおこなわれた全国中学生スキー大会のノルディック複合で、兄の健司が優勝、僕が2位。それまでは成績は僕が良かったのですが……。中学1年の時、僕は全国大会に出られたのに、健司は行けなかった。それが健司のハートに火をつけて後のオリンピックの金メダルにつながっていったのでしょうか。

その後、健司はインターハイで優勝しますが、僕は最高で3位あたりでした。高校に上がると世界ジュニアスキー選手権に出場するようになりました。このころから健司は世界で戦う意識が高まっていて早稲田大学スキー部のOBだった高校の担任の勧めもあり、大学は早稲田に行く決めていました。僕は健司が早稲田に行くと言ったから、ついて行くという感じでした。

大学時代は埼玉県所沢市での合宿所生活でした。健司は真面目に学業とトレーニングに励み、ワールドカップ

のメンバーに選ばれ、大学4年時にはオリンピックに出場して団体戦で金メダルを取るまでになりました。一方の僕は授業中寝ていて部活もそこそこ頑張る程度。毎晩遊びに出掛けて、インカレに出ても入賞できるかできないかといったレベルまで転落していました。

そんな生活をしていたので単位がかなり足りず、卒業が近づく苦勞しました。大事な試合があるから試験や単位がどうにかならないか教授に相談しても、「わかった」と認めてはくれません。逆に「来年受けなおせ」と言われてしまいました。

大学4年時に健司が金メダリストになって注目されると双子で顔がそっくりな僕はどこに行っても健司に間違われました。そのつど僕は双子の弟の次晴だと説明しましたが信じてもらえません。それどころか中には「嘘をつくな」という人もいました。痴漢をしていないのに痴漢だと言われる感覚に近かったですね。それがとても嫌で、嘘をついていないことを証明するには健司が一番注目される、オリンピックというステージに僕自身も上がるしかないと思えました。

兄弟だと、よく「ライバル関係ですか?」と聞かれます。でも僕ら双子は仲が良く、健司のことはライバルというより、自分にとっての目標でした。健司が頑張っている姿を手本にやっていただけで勝ちたいと思っただけではなかったのです。そんなわけで奮起して、ワールドカップのメンバーに選んでもらい、兄弟でのワン



スポーツキャスター
萩原次晴さん

ツーフィニッシュやサンダーベイでの世界選手権では、ともに団体優勝もできました。

— 子どものころは器械体操を習っていたとか。草津のご両親はスポーツ教育に力を入れていたのでしょうか。お二人ともアルパインツアー「世界の山旅」の超リピーターです。

僕ら双子は小学1年から5年まで器械体操教室に通っていました。それがスポーツ教育だったのかもしれませんが、田舎だったので身体づくりと健康のため、ごく普通に通っただけです。将来オリンピックを目指す気はさらさらありませんでした。冬になるとゲレンデスキーをやっている次第にそちらの方



▲次晴「登山部」 剣岳 山頂到着 頑張りました

